鶴見文化財学会報
Tsurumi Cultural Properties A.C

vol.17
2016年3月14日発行
鶴見大学文化財学会

文化財学科の実習旅行の思い出

河野　眞知郎

文化財学科の教育の柱に「実物・実地・実体験主義」ということがある。文化財のうち建造物や史跡を大学の教室に持ち込むことは不可能で、また文化財はそれを生み出した風土の中にあってこそ意義深いのだから、その所在する場を訪ねるべきというのが「実地主義」である。それで1年次の実習ＩＡでは4月の1泊バス旅行を含めた「巡検」を行っており、3年次の実習ⅢＢでは文化財の展示公開施設の実状を見る2泊3日の旅を課している。4年次の実習Ⅳは「遠隔地の文化財巡検」をテーマに、国外・国内・自主の3コースを選択できるようにしている。国外では中国・カンボジア・インド・イタリアなどに行った。国内では北海道から沖縄まで各地をめぐった。自主コースでは各自の研究テーマに沿った企画が立てられ、四国八十八ヶ所をチャリでまわったつわものもいた。

いずれも必修科目なので、意欲ある学生にとっては収穫の多いものとなったようだが、単位のためだけに嫌々（あるいは無目的に）参加した学生もいた。学会報にこんなことを書くか迷ったが、あえて苦言を呈し将来の改善の糧としてほしい。

実習ＩＡの1泊旅行は、さすがに入学直後の緊張感もあり、また学生同士のなれあいも少ないのでたいした問題はおきていない。しかし5月をすぎるともういけない。文化財学科開設の頃は鎌倉の有名な寺院でも「文化財を学ぶ学生さんたちなら特別に…」と本堂や開山塔まで入れてくれたのだが、最後尾についてくる意欲なき学生の態度の悪さに、「翌年からはお断り」という事態になった。とくに運動部所属学生は重要文化財建造物の裏手で傘をバットがわりにスイングしたり、博物館の中でダンスしてみたりした例があった。

実習ⅢＢでは正倉院の床下まで入れて頂いたのに、床の梁に手が届くかとジャンプした学生があり、翌年からは入れなくなった。また博物館の「展示環境」を学ぶはずが、夏の暑い時期とて見学をサボりロビーで涼んでいたり、館をぬけ出して近所の売店でソフトをなめている者もいた。

実習Ⅳの国外・国内ともに見学先が一般の観光地ではない所が多いせいか、あるいは長期で費用もかかるせいか、「元を取ろう」と概して昼の間はおとなしかったようだ。しかし「夜の部」は推して知るべしといったところだろう。

国外コースでは予定していた訪問先でテロ騒ぎがあったり、病気の流行などで代替地に行かざるをえないこともあった。これは学生諸君のせいではないが、費用を出してくれる親御さんに心配かけては、と教員側の自主規制もあったかもしれない。

また不可抗力的なこともあった。第1期生は2001年、中国の古窯址巡検を実施したが、全日程を終えて上海に着き明日は帰国という晩、故大三輪先生の部屋に集まり青島ビールなど飲んでいたところ、NHKのBS放送で（その頃には中国のホテルでもBS放送が見放題になっていた）、ニューヨークの世界貿易センターに飛行機が突っ込む場面の中継が流れた。「これは戦争になるのでは」と語り合った翌朝、バゲージダウンの際には持ち主がいちいちチェックされ、ガラガラの空港ではセキュリティーチェックがやたら厳しかったりしたが、日本行きの便は飛んでいたので予定の便で帰国することができた。

国内コースでも実施時期が秋口なので、台風の接近で沖縄からの帰りの便が飛ぶか飛ばないか心配させられたことがあった。その時は欠航直前の便で帰ることができた。北海道でも九州から日本海を通ってきた台風の影響で、やはり欠航直前の便で帰れた。

これまでの文化財学科の実習旅行は、まず幸運に恵まれたのか大きな事故なく、うまく行っているといえよう。しかし幸運に頼るだけでは旅行の目的は達せられない。国内・国外とも近年、学生さんたちの事前学習の不足が感じられる。現地に行ってから教員にきくのではなく、通り一遍の知識くらいはネットにあるのだから、最低限のことは調べておいてほしいものである（もちろん下調べ充分の学生もいるが）。定年退職を迎えるにあたって、文化財学科の幸運が続くことを祈ると共に実習旅行の実が一層あがることを願っている。

随　想

河野眞知郎教授と文化財学科

石田　千尋

今年度をもって河野眞知郎教授が定年退職を迎えられる。鶴見大学文学部文化財学科・同大学院文学研究科文化財学専攻・鶴見大学文化財学会は、河野先生なくしてはここまでくることはできなかったであろう。

日本文学科と英米文学科からなっていた鶴見大学文学部で、新学科を作る動きが出だしたのは平成6年頃からであった。当時、総合教育に所属されていた大三輪龍彦先生（平成18年逝去）、永田勝久先生、そして河野先生が中心となって新学科の検討が始められた。平成8年に至り「文化財学科」で進めることになり、文部省（現、文部科学省）に設置申請を出すこととなった。大三輪先生が大枠を作り、河野先生がカリキュラムを考案された。この時に河野先生が作られた文化財学科のカリキュラムは今も変わることなく、外部にも誇れるものとなっている。特に専攻科目と実習科目は文化財学科の大きな特徴として挙げることができる。河野先生は、文化財学に関して偏りのない知識と技術を、学生に身につけさせることを心がけられ「実物・実地・実体験主義」を謳われてきた。

筆者は文化財学科が設立された平成10年まで、女子短期大学部（現、短期大学部）に席を置いていた。文部省に提出する申請書作成段階で参加することになったが、大三輪・永田・河野の三先生の新しい学科を作り上げようとする情熱は痛いほど伝わってきた。特に河野先生のカリキュラム作成には目を見張るものがあった。作成当初「実習ⅡA」は「史料実習」とされていたことより、筆者は「史料講読」と考えていた。しかし、河野先生の中では史料講読でおわらず、史料（古文書）の扱いから修理までが念頭に置かれていた。河野先生のあらゆることに対するハードルの高さは十分承知していたが、学生時代から近世文書を読むことにエネルギーを費やしてきた史学科出身の筆者にとっては、ひとつの決断をせまられた。その後8年間、古文書修復の現場（中藤靖之氏の仕事場）にお世話になることになり、「古文書修復」の実習授業を開くことができた。いずれにしても、河野先生のお陰で実技を含む研究分野と人間関係を広げられたことは有難い限りである。

河野先生にはじめてお会いしたのは、先生が平成2年鶴見大学文学部に着任された時であった。その寡黙な姿勢にどのように接してよいものか迷ったものであるが、一旦ビールが入ると他人が喋っていてもものともせず語る饒舌な瞬間はとても愛すべき人物であった。また、知識の豊富さにはいつも頭が下がる。専門分野のことから一般常識まで知らないことを捜すことの方が難しいかもしれない。

河野先生は文化財学科の設置申請書作成作業の中で「私は常識学科を作りたい」といわれたことを覚えている。実はあらゆる学問もそうであろうが、文化財学というまだまだこれからの学問を真摯に学んでいくためには、まず常識を持ち、それを身につけることからはじめなければならないことを私達はあらためて確認しなければならない。

文化財学科を作られここまで盛り上げてこられた河野先生が退任されることは誠に残念なことである。しかし、残された我々は先生の今までの功績を引き継ぎ、また後につなげていかなければならない。

永年のご苦労に感謝すると共に、今後益々の御活躍を祈念してやまない。　（本学教授）

実習の感想

実習Ⅳ・国外コース　巡検報告

小池　富雄

教員の参加は星野玲子准教授と小池の2名。学生は6名であった。巡検先は、マカオ・香港である。主たるテーマは、西洋文明を受け入れた16世紀以降の長い歴史のある中国領マカオを訪ねて、東洋と西洋との融合、キリスト教や様々な宗教と人種の混合と調和を体験することであった。珠海デルタ河口のマカオ半島の先端部分南北10kmほどの狭い地域にポルトガル式の教会や建築が集中して残されている。2005年「マカオ歴史市街地区」として世界文化遺産に登録された。中国政府のマカオ特別行政区政府によって管理されている。現在では、観光業が唯一の産業で世界最大のカジノ産業で知られる。大航海時代以降、ポルトガル人が移住し、現在も街々の地名表示はポルトガル語と中国語である。カトリック信者は多いが、ポルトガル語を話す住民は、今ではほとんどいない。豊臣秀吉によりキリスト教が日本で禁教となると長崎から多くの日本人、混血児らがマカオに逃れて移住したという。今回の巡検ではマカオの世界遺産をすべて見尽くすのが主たる狙いであった。

香港は英国植民地で、返還された現在も世界の金融、アジア貿易の中心地の一つとして栄え、大学教育、博物館施設も高水準である。主要博物館を見学した。旅程の概略は下記。

9月4日－11日

羽田空港発―香港空港着マカオ入国―セナド広場―民政総署―仁慈堂―カテドラル―聖ヨゼフ修道院・聖堂「フランシスコ・ザビエルの聖遺骨」―聖ポール天主堂跡―マカオ博物館―ホートン図書館―聖アントニオ修道院―媽祖廟―港務局―鄭家屋敷―聖ローレンス教会―モンテ砦大砲台―香港入国・同大学博物館―中文大学博物館「宜興紫紗陶芸展」―施能河氏収集漆器見学―香港文化博物館―香港空港発―成田空港着

以上

実習Ⅳ国内旅行
奈良の文化財巡検を終えて

緒方　啓介

今年度は「奈良の文化財徹底探訪」をテーマに、8月31日から9月6日までの6泊7日で行った。参加学生は総勢30名を数え、引率教員は緒方と下室覚道先生であった。

8/31　興福寺－新薬師寺－頭塔
9/ 1　東大寺－奈良博－元興寺極楽坊－十輪院
9/ 2　唐招提寺－薬師寺－平城京資料館－不退寺
9/ 3　法隆寺－中宮寺－法輪寺－黒塚古墳展示館－長岳寺
9/ 4　長谷寺－室生寺－聖林寺－安倍文殊院
9/ 5　当麻寺－西南院－飛鳥
9/ 6　金峯山寺蔵王堂－吉水神社

1日目の興福寺の見学から始まり、2日目の東大寺では、前学長木村清孝先生のお口添えで大仏登壇と俊乗堂の特別拝観が可能となり、間近で大仏のスケール感を味わうことができた。3日目は唐招提寺や薬師寺を見学し、平城宮跡を巡った。4日目は雨となったが、法隆寺では我国最古の仏教美術を堪能し、黒塚古墳展示館で三角縁神獣鏡を見学した。この日の宿で偶然にも長谷寺の執事長様とのご縁ができ、5日目の長谷寺ではお坊様のご案内で見学することができた。鶴見大学の強みである。合掌。6日目は午前中に当麻寺を見学し、午後からは各自レンタサイクルで清々しい好天のなか飛鳥の史跡や古墳などを楽しみ、夜は吉野の宿での打ち上げで盛り上がった。7日目は蔵王堂と吉水神社の見学を行い、帰路についた。(写真は長谷寺にて)

文化財学会
春季大会・秋季シンポ関連報告

平成27年度春季講演会
『洋風画から油絵へ
～西洋と東洋の彩色技法・材料の出会いと融合～』

報告　3年　伊禮　拓郎
2年　岸　なつみ

平成27年度春季講演会は、6月6日（土）「洋風画から油絵へ～西洋と東洋の彩色技法・材料の出会いと融合～」と題し、文化財保存修復スタジオ主宰武田恵理氏にご講演頂いた。

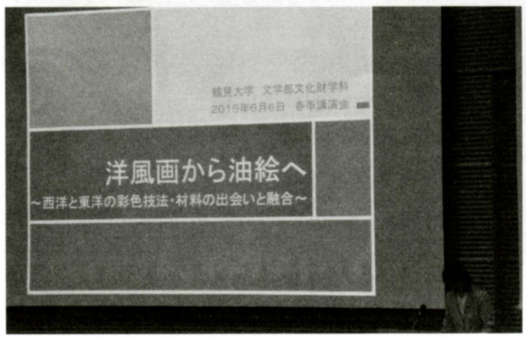
油絵の寿命は描画技法や材料という内面要因で左右される。そのために絵画組成、技法史の研究を進めてきた。日本の油絵技術は国外から導入され、国内の材料と融合し定着していった。しかし、材料があったとしても技法が自然に発生することは考えにくい。そこで、油絵の歴史的背景を振り返りつつ、「油絵の仕組み」「洋風画から油絵へ」「洋風画の技法」の3テーマについて西洋と東洋の彩色技法、材料の出会いと融合の検討が行われた。

「油絵のしくみ」では油絵の基本構造についての説明があった。油絵は下層から支持体、地塗り層、絵具層、ワニス層という構造になっている。支持体は、物質的基盤となるものである。地塗り層は絵の堅牢性を高め、絵具の描き心地を決める役割がある。絵具層は色材と固着剤、さらに添加物からできており、成分が油性からできていれば油絵、水性なら水彩、水性と油性が混ざったものなら半油性の絵具となる。このように固着成分によって絵画の分類が決まる。

「洋風画から油絵へ」では海外からもたらされた油絵が日本に定着する課程が述べられた。日本における油を使った描画技法の導入は密陀絵、初期洋風画、幕末洋風画、明治維新前後と4期に分けることができる。密陀絵は6～7世紀頃に中国から伝来した漆芸技法の1つで、蜜陀僧を混ぜて乾燥性を高めた荏ノ油を用いて描く技法である。初期洋風画は、16～17世紀頃にキリスト教とともに入ってきた技術である。セミナリオでイタリア人の絵画教師ジョバンニ・ニコラオが油彩等の指導し、イタリアルネサンス期のテンペラ技法が伝えられたと考えられる。しかし、幕府の禁教政策のため、多くの画家はマカオに流され技術が途絶えた。幕末洋風画は鎖国中、オランダより長崎の出島にもたらされた情報を元に描かれた。密陀絵の技術やフランドル技法の影響を受けており、司馬江漢や亜欧堂田善などが活躍した。明治維新前後は、1960年代にイタリア人のフォンタネージによって本格的な洋画教育が行われた。彼はテンペラで明部を厚めに下塗りし、油絵具で仕上げるという講義を行った。この時期になると渡欧作家の影響で技法・材料から表現へと作家の関心が移っていった。

「洋風画の技法」では固着剤に焦点をおき、武田氏が研究した「マリア十五玄義図」を中心に検討がなされた。さらに、文献をもとにした幕末洋風画の固着剤の実験動画が流された。日本の油絵は、技術習得や材料の入手が可能になって初めて制作が可能になる。初期洋風画時代ではテンペラ技法が定着しつつあったが画家が国外に追放され途絶えた。そのため、幕末の画家たちは、材料を集めるだけでも苦労が強いられ、技法の確立に創造性が注がれた。

武田氏は、作品から読み取れる過去の技を現代の修復に生かして今後も得られた情報を発信したいと述べられた。講演後は、活発に質疑応答が行われた。



平成27年度秋季シンポジウム『鎌倉考古学の到達点と展望』

報告　3年　伊禮　拓郎
2年　宮田　大生

平成27年度秋季シンポジウムは11月7日(土)、「鎌倉考古学の到達点と新展開」をメインテーマに5人の講演者を迎えて開催された。

本学科教授河野眞知郎氏は「鎌倉考古学の到達点と課題　基本10項目を検証して」と題して基調講演を行った。「都市鎌倉の範囲」「政権の諸機関と軍事施設」「都市インフラ整備」「御家人の宿所とその構造」「宗教的設備の設置と変遷」「都市住宅とその住居群」「消費経済と物流、銭と倉」「信仰と呪術、遊芸者」「都市における墓葬」「都市鎌倉の終わりとその後」の10項目を挙げ、各項目で到達された成果と未解明な点をあげた。未解明な点については若手研究者による今後の解明を期待していると述べた。

浄光明寺執事古田土俊一氏は「石造物で考える鎌倉」と題して講演を行った。鎌倉での石造物使用は13世紀末頃から始まる。東大寺復興に伴い来日した宋の石工が、西大寺の僧の布教活動に同行。その後鎌倉で技術が広がった。鎌倉の大型石塔は丘陵地に配置されており、幕府が認知する都市鎌倉の最大範囲の内側だけに立つと述べられた。これらは、大型石塔が幕府の都市整備に利用されたことを示す一つの証拠であると述べられた。

鎌倉市教委文化財課職員松吉里永子氏は、「かわらけ編年の再検討」と題して講演を行った。1983年以降、器形の変化や工房の差、政治的画期、共伴遺物の年代などを用いて、かわらけの編年が行われてきた。しかし、年代観については研究者により異なる。今後は編年の基準資料として一括資料を使う・今までの発掘調査成果の再整理・製作技法（成形・整形）から工人集団の差の検討が行われるべきであると述べられた。

本学大学院西下正純氏は「やぐら解明のために」と題して講演を行った。やぐらは中世鎌倉において横穴式に掘られた窟で、主に墓窟として使用されたほか、供養塔としても使われていた。やぐらの9割が鎌倉にあり神奈川県と房総半島には同型のやぐらが確認されている。宮城、福島、富山、石川、大分などでもやぐら状遺構が確認されている。これらは供養窟としての役割や火葬骨が検出している例もあり、墓窟の役割を示すものもある。時期や形状から鎌倉のやぐらと類似している点が多いが、遠隔地との関係は継続的な研究を行わなければならないと述べられた。

NPO法人鎌倉考古学研究所松吉大樹氏は「文献史学との協業 - 武士宿所の解明 - 」と題して講演を行った。古代以来の宿所の概念を再確認し、『吾妻鏡』の事例から、中世都市鎌倉における宿所の機能的表現の多様性と規定の難しさを指摘された。しかし、今小路西遺跡から出土した墨書板には宿所警護の結番交名が記されていることを指摘。当遺跡周辺の研究状況を鑑み、安達氏とその被官の存在を提示し、封建的主従関係と、それに近似した擬制的主従関係の存在を明示された。

質疑応答では松吉大樹氏に対し、墨書板の再利用の確認と『沙石集』を例に挙げた擬制的主従関係について質問が出た。墨書板は掲示が終わった後にまな板として転用された可能性を返答。擬制的主従関係の他の具体的な類例については、今後の課題としつつ未詳と返答された。それについて河野氏は、得宗被官の鎌倉における動向について触れ、御家人の被官層の存在を示唆された。

討論では今後の鎌倉研究についての活発な意見が交わされ、討論の最後には河野氏から若手研究者に向けてアドバイスが述べられた。

研究部会報告

江戸東京研究部会

江戸東京研究部会は、「歩くと歴史が見えてくる」をモットーに活動を行っています。東京に関する史跡・博物館などの巡検を行っています。

今年度は、9月19日に東京都江東区亀戸にある亀戸天神社へ巡検に行き、江戸の下町にある神社の特徴や歴史を学びました。亀戸天神は菅原道真公をお祀りし下町の天神さまとして広く知れ渡り、江戸時代から多くの人々に親しまれています。古くは福岡県の太宰府天満宮との深い関係があり、学問の神様として信仰されています。

これからの江戸東京研究部会の活動はただ巡検を行うのではなく、部員の興味・関心を重視した活発な活動を行なってゆきたいと思います。さらに、新入生の皆さんが本研究部会を知って頂けるように幅広く活動していきたいです。

歴史考古学研究部会

歴史考古学研究部会とは主に考古学、文献史学を中心とした研究を行う研究部会です。毎週金曜日午後6時から6号館地下考古学実習室にて実習の授業で習得したナンバリング・実測・拓本・トレースなどの技術やレポートのまとめ方などを積極的に実践し活動しています。平成25年度から鎌倉由比ヶ浜や鎌倉市街地、江の島片瀬海岸などで古代、中世期の土器・陶磁器片を採集できるという事実から着想を得て、巡見で土器・陶磁器片を採集し、ナンバリングを施し整理した後実測や拓本の作成、調査研究する活動を行っております。そして最終的に作成した実測図や調査研究成果を報告書としてまとめることを目標としています。

平成27年度では採集資料の調査研究を行いつつ、鶴見大学文化祭「紫雲祭」においてそれまでに整理、調査研究を行った土器・陶磁器片を調査成果とともに展示する活動を行いました。今後も採集巡検を行いつつ採集した資料の更なる調査研究を行い、また新たな試みとして各地で行われている発掘調査成果報告会の参加、発掘現場の見学、遠隔地への巡検を予定しております。

考古学や文献史学に興味がある方、考古学資料の実物に触れてみたい方、実測などの細かい作業が得意な方、レポートや調査研究が好きな方は是非見学にいらしてください。

古典芸能研究部会

今年の活動は成徳大学の青柳隆志教授をお招きして、能楽体験と十二単の装束体験を行いました。

2月の能楽体験は笙を演奏しました。笙は吹くと必ず音が鳴る楽器で、初心者でも簡単に音を出す事が出来ます。基本的な指使いを覚えて、最後は越天楽を全員で演奏しました。

8月に行った装束体験では十二単の着付けを体験させていただきました。十二単というのは、平安時代の女房装束で、正式名称を五衣唐衣裳（いつつぎぬからころも）といいます。実際に十二枚着ているのではなく、たくさんの衣を重ねて着ることからこの名前がつきました。

今回は着付ける方と着せられる方の両方を体験しました。装束など体に身に着ける類の物は一度着ることで構造を覚えられると青柳教授は仰います。確かに着せられていると後ろや前で何を行われているのかわかるので、着付けられた後に着付ける側に回ると比較的手早く着せることができたように思います。

能楽体験も十二単の着付けも普段の生活の中では関わることができない日本の文化と触れ合えるよい機会でした。

美術工芸研究部会

美術工芸研究部会は、絵画・漆芸品などの美術品や工芸品を扱った博物館や美術館の巡検を行い、幅広い知識や視野を持ち、学び研究することを主な目的として活動しています。

今年度の主な活動は、博物館巡検と夏季休暇期間に行った工芸品の製作体験でした。

4月中旬に日本民藝館を見学し、「工芸品」「民芸品」とはこんなに多種多様なのかと驚きを覚えました。

6月中旬には、県立金沢文庫で「平成大修理記念　日向薬師－秘仏鉈彫本尊開帳－」を見学しました。鉈彫を見るのは初めての経験だったことから、興味深い見学となりました。

8月下旬には「箱根寄木細工ひみつ箱製作体験」を行いました。箱根寄木細工のひみつ箱を組立てる段階から、表面を蝋で磨く仕上げの工程まで行いました。ひみつ箱の製作過程を知ることができ、楽しい体験となりました。

10月下旬には、本学科の緒方准教授と三井記念美術館「蔵王権現と修験の秘宝」の見学を行いました。作品について解説をして頂きながらの見学は初めてのことで、とても勉強になりました。

今年度は2か月に1回という例年より活発に活動ができています。来年度もこのように活動をしていきたいと思います。

宗教研究部会

私たち宗教研究部会は寺院や神社への巡検、宗教にまつわる博物館見学、研究部会内でのプレゼンなどを中心に活動を行っています。

今年度は曹洞宗大本山總持寺宝蔵館の巡検、部会内でのプレゼンを行いました。總持寺は元亨元（1321）年、石川県輪島市に瑩山紹瑾禅師によって開創されました。しかし、明治31（1898）年に火災が起こり、慈雲閣・伝燈院を除くすべての伽藍が焼失しました。これを契機に、時代の推移と宗門の要請によって明治44（1911）年横浜鶴見に移転しました。現在、石川県の旧跡には總持寺祖院が再興されています。宝蔵館「嫡々庵」は、昭和49（1974）年に總持寺開山瑩山禅師650回大遠忌の記念事業として建立され、昭和51（1976）年より總持寺所蔵の文化財を一般公開し、約3ヵ月に1度展示替えを行っています。

部会内のプレゼンでは実習Ⅳや学外館務実習のことについて発表しました。

今年度はあまり活動ができませんでしたが、来年度は部会員の意見を取り入れ、月1回の活動を目標に活動していきたいと思います。

うるし研究部会

私たちは作品制作や産地見学を通し、漆への理解を深めることを活動理念としています。

今年度は作品制作や研出蒔絵と変わり塗の加飾についての勉強会を行ったほか、前期にはナヤシ・クロメの作業、夏休み期間中には産地見学、鎧櫃の修復、図書館貴重書展に小池ゼミと共に参加しました。

産地見学では国産漆の最大産地である岩手県二戸市浄法寺を訪ねました。漆畑や漆掻きの現場を見学し、漆産地の現状や現在浄法寺で行われている取り組みについて学ぶことができ、漆への理解を深めることができました。

夏休み期間中は学科が所蔵している甲冑の鎧櫃一具を修復しました。身側面に大きな亀裂が入っていたため、クリーニング後亀裂部の充填を行いました。また、漆塗膜補強のための摺漆を施しました。

10月10日～11月25日にかけて行われた図書館貴重書展「文化財学科の宝物　新収集品を中心にして」は小池ゼミと共同で準備にあたりました。鎧掛や展示台の製作、展示図面の作成、作品展示等を行い博物館展示の一端を学ぶことができました。

今年度は鎧櫃の修復や図書館貴重書展の準備など初めての試みもあり、とても充実した活動ができました。来年度はより多くの人に漆への興味をもっていただけるよう、より活発な活動を行っていきたいと思います。

鶴見大学文化財学会会則

1．本会は鶴見大学文化財学会と称する。
2．本会は鶴見大学文化財学科教職員・学生および卒業生、その他の関係者をもって組織する。
3．本会は文化財にかかわる人文・自然諸科学の学問交流を活発化し、会員相互の研究を推進し、かつ親睦をはかることを目的とする。
4．本会は総会を毎年一回開く。ただし必要に応じて随時会長がこれを招集することができる。
5．本会はその目的を達成するために次の事業を行う。
　1　研究等の発表
　2　講演会の開催
　3　会誌・会報等の編集刊行
　4　研究部会活動
　5　HP上での広報活動
　6　親睦その他の事業
6．本会に次の役員を置く
　1　会長（1名）は学科長に委任し、本会を代表し会務を統括する。
　2　委員（若干名）。委員は諸事業の企画運営に携わり、会員間それぞれで互選する。任期は一年とし留任を妨げない。
7．本会の経費は会費（年額千五百円）、寄付金その他の収入をもってこれに充てる。
8．本会の事務所は下記におく。
　〒230-8501
　神奈川県横浜市鶴見区鶴見2丁目1番地5号
　鶴見大学6号館文化財学科合同研究室

付　平成11年10月16日から発足する。
付2　平成16年4月1日　一部改正
付3　平成23年4月1日　一部改正
付4　平成28年4月1日　一部改正

平成28年度の年間行事予定

●春季講演会
日　時：6月4日（土）　午後3時から
会　場：鶴見大学大学会館メインホール（予定）
テーマ：「小型鏡からみた倭鏡の意義（仮）」
講　師：新井　悟氏
（川崎市市民ミュージアム学芸員）

●秋季シンポジウム
日　時：11月5日（土）　午後1時から
会　場：鶴見大学大学会館メインホール（予定）
テーマ：「海外の考古学（仮）」

■お問い合わせ
045（580）8139　文化財学科 合同研究室

編集後記

無事に文化財学会報17号を刊行することが出来ました。執筆やご助力頂いた多くの方々へ、この場をお借りして篤く御礼を申し上げます。また河野先生ご退職の年に担当させて頂き、大変光栄に思います。今後よりよい学会になるように委員一同頑張っていきたいと思います。

（会報編集担当一同）

連絡先
〒230-8501 神奈川県横浜市鶴見区鶴見2丁目1番地5号
鶴見大学　文化財学会
TEL：045（580）8139
URL：http://ccs.tsurumi-u.ac.jp/bunkazaigakkai/index.html
E-mail：bunkazai@tsurumi-u.ac.jp